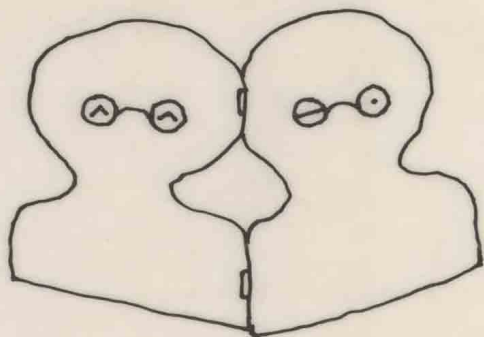


Humorous Stories

朝鮮ユーモア文学傑作選
笑いの三千里

金学烈・高演義＝編



白水 *u* ブックス

白水 *u* ブックス

97

笑いの三千里 朝鮮ユーモア文学傑作選

編者 © キムハンヨル
金学烈
コヨンイ
高演義

発行者 藤原一晃

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町 3-24

振替東京 9-33228 千101

電話 (03) 3291-7811 (営業部)

(03) 3291-7821 (編集部)

1992 年 6 月 10 日印刷

1992 年 6 月 25 日発行

本文印刷 理想社

表紙印刷 集美堂

製 本 加瀬製本所

Printed in Japan

ISBN 4-560-07097-0

Stories

朝鮮ユーモア文学傑作選

笑いの三千里

金学烈・高演義＝編

白水 *U* ブックス

目次

鳳伊金先達行狀記（朴興珉）

- 罪と罰（7） ふろしき包みを返せ（26） 割れた硯石（33）
せつかちな新郎（48） 鳳伊というあだ名（56）

笑いのショートショート（趙能植）

- 魚を獲ろうと（65） 金づち（66） けちんぼ（66）
ある旅人（68） 金瓶梅（70） 口ぐせ（71）
がんこ者（73） ほら吹き（75） 二人の言いぐさ（78）
元手が減って（79） 嘘ひとつ（80） 百両の行くえ（81）
牛を交換したつもりが（82） 欲ばりの思惑（84）
酒宴（86） カラスの肉（87） 金さえ払えば（88）
酒と餅（90） あまり暑くて（92） 魚つり場で（93）

啞がしゃべるのか(94) 金持ちか、それとも乞食か(95)

急ぐわけ(97) おまえが、なぜ?(97) 口実(98)

ちようどよかったですわ(99) 借用証書(100)

二つしかないわよ(102)

笑いのコント

大物、じつに大物——孟斗哲の青春告白(李鎬光)

失業者バンザイ——ある有権者の日記(李鎬光)

ある歴史意識(朴婉緒)

古参・新参対面式——大人だけ読む童話(柳時春)

死ねばせめて棺桶だけでも(南廷賢)

立ち入り禁止(康震基)

大統領の食卓(金仁淑)

そうだね……(柳舜夏)

沈黙は金なり(崔仁浩)

笑いのドラマ

一しずくの重さ（李永男）

219

「検討してみましよう」（韓太甲）

230

いっさいの面会を謝絶せよ（宋 影）

257

兄さんのラブレター（李箕永）

284

阿呆のヨンチリ（崔泰応）

306

解 説（金学烈）

327

朴興珉

ボンイ キムソンダリ

鳳伊金先達行状記

罪と罰

春という季節は確かに女たちだけのものらしい。そうでもなければ、広くその名を馳せた鳳伊金先達^{ダリ}がこんな気だるくなるはずがない。うす暗い部屋の中で大の字になって寝ころんでは、天井をまじまじと見あげる鳳伊金先達は全身ぐったりと疲れ、まったくのところ指一つ動かすことすら煩わしいのであった。

どنگり目をそっと閉じ、眠ろうとする。しかし、だめだ。気だるくてぐったりして、身動きすることすらおっくうなのに、なかなか眠気がこない。

——なぜだろう？——

金先達は目を開き、静かに考えにひたった。どうすればこの退屈な心と体を満足させることができ

るであらうかと、考えるのであった。

しばらくの間、その大きな目をぎよろぎよろさせ考えにふけていた鳳伊金先達は、何か妙案が浮かんだかのように、がばつと飛び起きた。

——そうだ。今度の八日（四月八日）には妙香山ミヨヒヤンサンにでも行つてみよう——

いつも生活が面白くなく気が晴れないと、ふいと家を出て行く鳳伊金先達であった。ふところにただの一銭の金がなくても、ためらわず家を出る金先達であった。天下の家という家が全部自分の家であり、人々の持っている金が全部自分の金であると思つてゐる、そんな金先達だったからである。

体が氣だるく疲れっぱいのが春の陽気のせいとも知らず、長い間外の風にあたつていないためと思つた金先達は、以前から一度は行つてみたかつた妙香山の見物をしようと心に決めた。

一度決めると、その実行に向けてただちにことを運ぶのが彼の氣質であり性格であつた。

ぱつと立ちあがつた金先達は、上着をひっかけ外へ出た。旅費もさることながら、こんなにのどかな春の日に、妙香山見物に一人わびしく出かける法はなからうと、同行の者を集めようと思つたのだ。

「もし、ケットン（犬の糞の意、子どもの名）おばさん」

先達は、村で一番あけすけで陽気な婦人であるケットンおばさんを訪ねた。遊び好きで見物好きな婦人であつた。

「え？」

「妙香山見物に行きませんか」

遊びと見物が大好きなケットンお婆さんの心が動かないわけがない。

「いつ？」

「今度の八日の日」

「行きます」

二つ返事で賛同し、いっしょに行こうということになった。つぎに、やはり大らかな気性のめっかち父さんのところへ行つた。

「めっかち父さん」

「うん？」

「妙香山見物に行かないかね？」

「いつ？」

「今度の四月八日」

「誰だれが行くのかな？」

金先達と二人きりで行くのならやめようとの考えからであった。金先達と二人だけで行くことになると、自分が金先達の分の旅費はもちろん、人のふところぐあいなど考えもせず、やたらに飲む酒代まで引きうけさせられかねないからである。

「ケットンお婆さんは行くと言つたし、ほかの者はこれから意向を聞きに行くところだ」

「行ってみるか……」

二人きりでないなら、かえって金先達は面白いことをいろいろして見せてくれるだろう、皆といっしょに見物に行くのならいい、そうめっかち父さんは思ったのである。

「躊躇しないではつきり言ってくださいよ。そうすれば人数も確かめられることだし」

めっかち父さんの性格を見透かしている金先達のこと、こう釘を刺すのであった。そうしないと、すぐには「はい」と言わぬめっかち父さんであることを、もちろん金先達は知りつくしていたのだ。

「行きましよう！」

このように村じゅうをまわり歩き、妙香山見物に勧誘し誘惑する金先達であった。

「わたしもいっしょに行きましようや」

「わたしも行くわ」

「おれも行くよ」

金先達の誘惑と勧めを受けた村人たちは、男、女、年寄り、若者を問わず、われもわれもと応じてきた。あげくのはては嫁入り前の娘も、親の承諾を得て、見物に加わると言い出す始末。

——ふふふ、これだけ人が集まればしめたもの。皆を連れて行きさえすりゃ、旅費なしでも妙香山見物が楽しめる——

ひとりつぶやきながらほくそえむ金先達であった。

これは、村人たちが自分を、ある面では敬遠しながらも、人びとを楽しませ喜ばせる先達といっし

よにいろのを好むということ、もう一つは、当時の平安道ヒョウアンダウの人たちが生前、妙香山見物をせずに死ぬと極楽世界へ行けないという迷信を信じているその心理を利用してのことであった。

なおかつ陰曆四月八日を選んだのは、四月八日が釈迦如来の誕生日であり、この日に妙香山へ行けば、いっそうの御利益があるのでないかという人びとの心理を利用したのだった。

「これでよし」と満足げに、そのまま金先達は酒場へ行き、酒場の女が顔をしかめようがおかまになしに、飲みたいだけ飲むと家へ帰り、ばたたと横になった。さっきのように体がだるくもなく、すぐに寝ついてしまう金先達であった。

八日の日が来た。

皆が心待ちにしていた祭日の四月八日である。先達の住む村は、わいわいがやがやと騒がしくなった。新しい服を着ては楽しそうにはしゃぐ子どもたち、妙香山見物にむかう人たち、そんな人たちを見送る家族らで村じゅうがごったがえした。

妙香山へむかう皆の背には食糧が担がれていたが、金先達一人だけは手ぶらで、杖を一本持っているだけであった。だが、これを変に思う人は一人もない。金先達に対しては同行の者が誰でも食べさせ、かつ宿泊させるものと、あらかじめ得心していたからであった。

妙香山観光団の数十人は八日の日の暮れに、ようやく妙香山の登山口に着いた。一日目はそこで夜を過ごすことにした。夜を過ごしながら、金先達は口を閉じることがなかった。際限なく話をしては、同行の者たちが休息を取れないようにした。じつはこれも、彼らを楽しませようという善意からでは

なく、自分が酒を浴びるほど飲んで寝ようとの魂胆なのであった。

「話をする喉が渇くもんですよ」

「そうでしょうとも」

「だったら、こうして、からからのままで話ができますか」

「冷たい水でも汲んで来ましょうか」

「冷水をたくさん飲むと腹をこわしますよ」

「あ、そうか。お酒が飲みたいということですか？」

「もちろんです」

こうして夜遅くまで酒を楽しむ金先達であった。少しも人の気を損ねることなく、ただ酒を飲む天性のすべを持ちあわせた金先達であった。

翌朝、早々に出発した観光団一行は普賢寺ポヒョンサを見学した後、その寺の僧一人に案内をさせ妙香山に登った。妙香山の景観はまことに絶妙であった。

「さすが名勝だな！」

「だから、ここを見ないで死ぬと、死んだ魂が極楽へ行けないというじゃないか」

金先達のみならず、皆が皆この絶景無比の妙香山を目のあたりにして、いたく感動した。

「金先達のおかげですばらしい見物ができたよ」

自分たちが金先達の旅費まであがないながらも、金先達のおかげさまだとほめそやす。

「だから、いつもわたしの言うことをちゃんと聞けば、まちがいないんですよ。ちっとも損することはないんだから」

金先達は肩で風を切りながら大いばりで、一行の先頭に立って山を登った。しきりに案内役の僧と話しながら、上院岩サンウオンアムの絶壁に來た。妙香山の中でも、登るのにもっとも骨が折れる険しい危険なところが、ここである。

一行はこの絶壁にさしかかると、ふうふうと息を切らし、ついに悲鳴をあげた。

「ひゃあー」

「ふうっー」

「わたしは、もうこれ以上登れないわ」

「ああ、お願い、わたしの手をちょっと掴まえてよ」

女の体面も忘れたかのように男に手をのばし、掴んでくれとわめきたてる。

そうするしかない状況であった。へたに足を踏みはずすと滑って、そのまま数十尺もある断崖の谷底に落ちてしまう。谷底へ滑り落ちたが最後、いかなる手だてをもっても誰も命を救うことができないそんな難所であった。したがって、体面も何もあったものではない、たがいに手をのばし、ひっぱってくれとの声がしきりである。

いかなる者も、どうしておのき恐れずにいられよう。胸中のいかなる秘密をも吐かずにはいられない、危険この上ないところであった。

「これくらいのことでは何をそんなに騒ぐのか」と、えらそうな口を叩く金先達も、さすがに全身びっしょり脂汗をかき、その大きな眼をさらに大きくさせ、はあはあ息を弾ませている。このようなありさまでは誰かれなく、ただひたすら、この危険千万な難所をなんとか無事突破しようという考えだけでいっぱいになるものであるが、ひとり、一大才士であり天下無比のいたずら者である金先達のみは、そうでなかった。

「ああ、わたしはもう駄目。これ以上登れないわ」とべったりと座りこむ娘と、そして男どもに「手を掴んで」と腕をさし出す婦人の様子を見て、ひとつここでいたずらをしてやろうという気が湧き起こった。こんな余裕ある心までそなえ持つ金先達、これは才士であるだけでなく豪傑でもあるというほかない。

「もし、お坊さん」

道案内の僧をそっと呼んだ。

「はい」

「わたしたちはここで少し休んで、ちょっと話をして行きますので、お坊さんはさきに頂上へ登って休んでいてください。後を追って、すぐ登って行きますから」

「そうですか」

金先達の悪だくみを知るよしもない僧はなんの疑いも抱かず、さっさと山を登って行った。日ごろ登り慣れている山道であるので、僧は苦もなく、ひよいひよいと頂きへ登って行った。それをぼん

やり見つめながら立っていた金先達は、僧が完全に山の上に登ったことを見とどけたあと、変な格好をした岩の前へ歩いて行き、ばたつと地面にうつぶせた。そして、

「山神さま、山神さま。神さまに申しあげます。この無知なる人間は、頭の鈍いがゆえ、ここをそのまま通り過ぎようと思いました。まことに無知でありました。お許しくださるとともに見守ってくださいませ。無知なる鳳伊金先達は山神さまに、今まで犯した罪をひとつ残らず申しあげます。無知なる金先達は二歳にして、家にいた黒い仔犬と関係を持ちました。そしてまた五歳にして馬とあい交わり、十歳にしてハツカネズミを強姦いたしました。その罪、死んであたりまえであります、神さまの寛大なるお恵みでもってどうかその罪を許してくださいませ。許してくださいませ」

ごたくを並べては何度も頭を下げるのであった。

切り立つ険しい山を登ろうと汗だくになり、今や顔色も青ざめてきた一行は、このとつぜんの金先達のふるまいがおかしくも異常であつたので、あつけにとられ、ただきょとんと眺めている。幾度となく頭を下げた金先達、地面から立ちあがり、一行を振りかえると、

「この場所はごらんのとおり、こんなに危険なところですよ。一歩でも踏み外すと絶壁から落ちて死んでしまうのです。しかしこんな危険なところも、わけなく無事に登りきる方法がひとつあります。それを先ほど寺で住職さんから聞いていたのを、すっかり忘れていました。それはほかでもなく、この上院岩の崖を登る人は皆自分の犯した罪をすべて山神さまに告げて、お許しを乞うことです。わたしたちが過去に犯した罪を、ここの山神さまは全部知っておられます。でも、それを告げず、お